

## ニオイズム ～点描が魅せるミクロの芸術世界～

ニオは、1966年、「石畳と緑の町」として知られるフランスのベルジュラック近郊で生まれました。

彼の故郷、ペリゴールは、自然に恵まれた美しい町です。どこまでも広がる緑の丘陵、マツやオークの森、タバコや穀物・ブドウが育つ広大な畑、そして、ゆったりと流れるドルドーニュ川のほとりには、いくつもの古城や要塞が立ち並んでいます。

ニオは、その少年時代を、雄大な自然と共に過ごし、彼の中には、幼い頃から「自然への愛情」が育まれていました。大学で造園を学び、景観庭師として働いていた彼を、しかし不幸な事故が襲います。この事故で重傷を負ったことが、皮肉にも、ニオを、芸術と絵画の世界へと向かわせたのです。

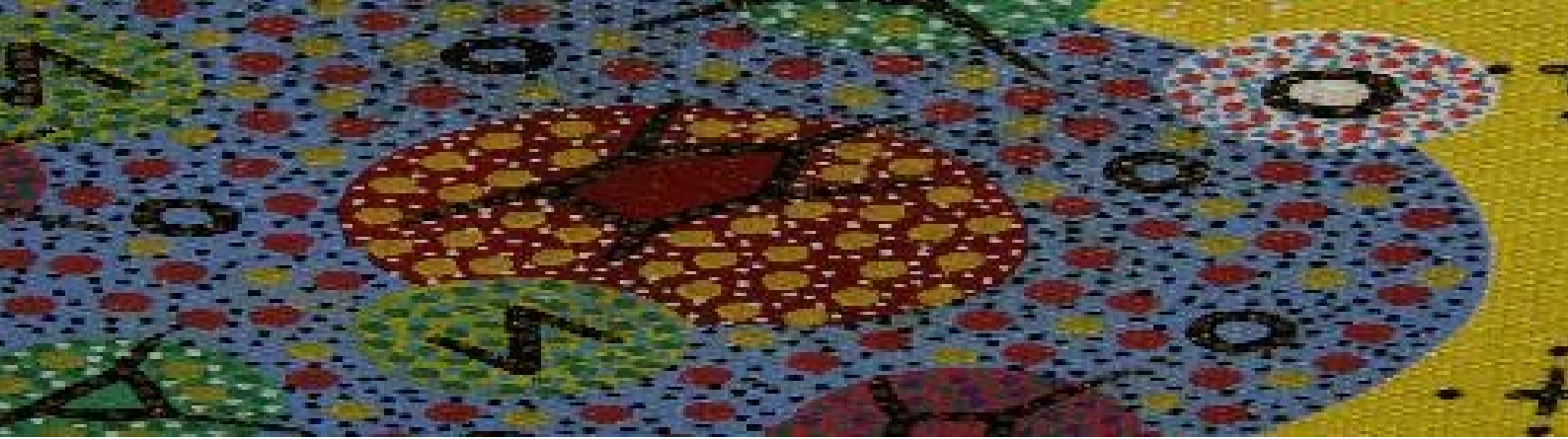
造園学を学ぶ中で身につけた顕微鏡の知識と技術にインスピレーションを得た彼は、迷うことなく、それを独自のアートスタイルに取り入れました。顕微鏡を通して発見した新しい色彩と形の世界——この時の感銘が、今日の彼の作品に大きく反映されています。

ニオは、1992年から1995年までを、ドイツのベルリンで過ごしました。「芸術と自然の融合・芸術の社会への歩み寄り」をベルリンでの創作活動のテーマに掲げた彼は、作品の中に「自然」を印象付けるため、自然な環境の下で生まれた芸術に取り組み始めました。伝統的な形・色彩を持つことで知られる、中南米やアンデス地方の民族の様々な芸術文化、鮮やかな色と厳格に定められた表現手法を持つマヤ文化、北米民族の楔形文字や、オーストラリア先住民の点描芸術——などなど。

特にこの点描という手法は、ニオのスタイルに最も大きな影響を与えています。自然の中に存在するもの同士の、目に見えない原子レベルの「つながり」、空間的な「つながり」を、目に見える形で表現したい。どのような芸術の中にも、目に見える形で自然を残したい。現代の情報社会に、芸術をどっぷりと浸からせたくはない——。

彼のその姿勢は、作品の中に「クレッシェンドとデクレッシェンド」として表れており、私たちに、「全ての生命の興（おこ）りと終わり」を感じさせてくれます。

彼の絵は、現代社会が抱える不安を打ち破り、物事をはっきりと眼前につきつけてくれるのです。



スペインのラ・ゴメラ島における9年間の沈黙のあと、ニオは、2006年から、点描画家としての活動を再開しました。具象的な絵も抽象的なモチーフも、それらはすべて、イタリアのガラス工芸「ミルフィオリ（千の花）」をほうふつとさせる構造の、大小様々な絵の具の滴り——点から成り立っています。ニオの絵の世界は、こうして創られていくのです。

力強く雄雄しい色彩と、無機質で繊細な色彩の共演は、見ている私たちに、いつも新しい発見をもたらしてくれます。その絵は、顕微鏡を通してしか視ることのできないミクロの世界へと、私たちに誘います。

これがニオの世界・ニオイズムなのです。

ニオは現在、ドイツのフランクフルト・アム・マイン近郊のバート・ナウハイムという小さな町で暮らしています。

Übersetzung ins Japanische: Sumire Dan, Bad Nauheim